

地元の森を学び舎に

創造力と感性を育む野外保育

report

自然環境から学ぶ幼児教育

— 智頭町森のようちえん「まるたんぼう」 —



杉林を散策する「まるたんぼう」の園児たち。園舎はなく、智頭町全体に広がる山林を活用したダイナミックなフィールドが拠点。自主的に行動する「お散歩」が活動の中心で、園長と専属の保育士が毎日同行。スタッフの人件費と運営費の一部を鳥取県と智頭町が助成している



保育士が絵本の読み聞かせをする「かえりの会」。他にも手遊びや歌、一人ひとりのあいさつなど、朝礼と終礼にはじっくりと時間をかけ、子どもの集中力を高める

弁当、おやつ、水筒、着替えなどが詰まったリュックサックを背負い、山の斜面やでこぼこ道を歩く。「お散歩」の積み重ねにより子どもの心と体は鍛えられる



代表の西村早栄子さんと次女の安旦那ちゃん。「森のようちえんを広め、智頭町へ移住する子育て世帯を増やしたい」と抱負を語る西村さんのお子も「まるたんぼう」に通っている

子どもにとって「木」は格好の遊び道具。園児たちは創造力と好奇心をフルに働かせ、自然の中から思い思いの遊びをつくり出す



「まるたんぼう」問い合わせ先

〒689-1442 鳥取県八頭郡智頭町大屋407
TEL:0858-78-6789
http://marutanbou_tizu@yahoo.co.jp



調理には地元の薪を使う。この日の「火つけ担当」は年長の駿くん（手前左）。担当は交替制で、毎回、園児が責任を持って火をおこす



木曜日は園児が昼食をつくる「クッキングの日」。メニューはごはんと味噌汁で、材料は各自が持ち寄る。包丁使いは手馴れたもので、調理の進行や役割分担、後かたづけも園児が自主的に行う



薪で炊いたごはんは格別おいしい。自然の中では食欲が進み、ほとんどの子どもがおかわりをする

森の中で生きる力を身につける

清々しい空気に満ちた朝の森の中、リュックサックを背負い、おそろいの熊鈴をつけた子どもたちが、歓声をあげながら杉木立の間を駆け回る。鳥取県南東部にある八頭郡智頭町。面積の94%を山林が占める緑豊かな町に発足した森のようちえん『まるたんぼう』の園児は、雨の日も雪の日も森へ出かける。

自然環境で幼児教育を行う「森のようちえん」はデンマークが発祥で、近年、日本でも徐々に認知度が向上し、幼稚園や保育園の他、様々な団体を取り組み始めている。『まるたんぼう』は智頭町に住む子育て世代の父母らが発起人となり、町の支援をもとに2009年4月に開園した任意団体。現在は鳥取県の「森林環境保全税」からの助成も受けており、行政と町民の強い連携による運営が特徴である。

園舎は持たず、町周辺の開けた森から山奥の原生林まで、9カ所のフィールドを拠点とする。その野外活動の中心となるのが、子どもが自主的に行動する「お散歩」だ。

「川遊びや木登り、虫や植物の観察など、子どものやりたいことを尊重し、個人のペースに合わせる待つ保育が基本です。森は子どもの好奇心を掻き立て、エネルギーを引き出してくれる場所の一つ。お散歩で遊びの創造力を広げたり四季の移ろいを感じたりと、子どもは自然の中で毎日新しい発見をしながら生きる力を身につけています」と話す

のは、智頭町の自然にひかれ、県外から移住してきたという代表の西村早栄子さん。

園児の数は現在13名。引率は園長と専属の保育士2名が行う。対象年齢は1歳児から5歳児で、3歳までの子どもは保護者の同伴が必要。また、夕方までの預かりが可能で、共働き世帯にも対応している。保育の内容は、月曜から金曜まで、毎日午前中に行う「お散歩」に加えて週2回、ものづくりやクッキングといった活動も行っている。取材に訪れた木曜日はクッキングの日で、園児たちが昼食をつくる様子を見学。年齢に関係なく皆が一緒に調理を行い、年長が年少の子どもを気遣い手を貸すなど、相手を思いやり、仲間意識を持って取り組む姿が印象的であった。「たくさんさんの気付きを与えてくれる自然環境だからこそ、自主的に学べる。私たちは指導者というよりも、観察者として子どもを見守っています」。そう語る園長の熊谷京子さんも毎日森へ入り、子どもの成長を日々実感しているという。

昨年、『まるたんぼう』への入園を希望する家族が鳥取市内から移住してきた。子育て世代の若い世帯を引きつけ、地域の活性化にも貢献する『まるたんぼう』の活動に、町も期待を寄せている。心身ともに健全な子どもは地域の財産であり、その育ちの場として森が果たす役割は大きい。智頭町の風土と人がつくり上げた森、そこで幼児期を過ごした子どもたちの将来が楽しみだ。